

研究課題名: ジュニア選手における自己効力感に関する研究-採点競技と得点種目に着目して-
研究代表者: 植松雄太

緒言

平成 25 年 2 月に文部科学大臣よりスポーツ指導における暴力根絶を目指したメッセージが発表された。「そもそもスポーツはスポーツ基本法にうたわれている心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神の涵養などのためであり、世界共通の人類の文化であって暴力とは相違れない。柔道のみならず他の競技も含めて実態を調査し、スポーツ指導の名の下に暴力を見過ごしてこなかったか、改めて現実を直視すべきである」と述べられている。

目的

日本体育協会にある競技団体から調査開始するにあたり、もっとも調査が難しいとされる各競技の日本代表レベルをどのように調査するか検討したが、北海道にて全日本合宿を行い、一度に代表・全国レベルのデータ収集が可能な競技がエアロビック競技であった。エアロビック競技は急激に競技志向が変わった競技の 1 つでもあるが、評価基準において芸術・実施・難度の 3 つから構成され、大人から子どもまで年齢・性別を考慮されずに同じルールを使うという特異性があり、今回の目的である競技別 GPGC 調査として適した競技種目である。

方法

(GPGC 調査)

5 件法にて「そう思う」から「そう思わない」まで 5 段階をタブレット端末にて直接、プレーヤーとコーチが回答

(質問項目)

1. グッドプレーヤーに求められる資質 (重要度・習熟度) <各 15 問>、2. プレーヤーを育成するコーチに求められる資質 (重要度・習熟度) <各 34 問>、3. スポーツ活動において大切にしていること <14 問>、4. スポーツにおける課題 <12 問>、5. スポーツ指導活動において大切にしていること <14 問>、6. スポーツ指導課題における課題 <12 問>

(被験者)

エアロビック競技日本代表選手 11 歳～17 歳 男女 10 名、代表選手の専属コーチ男女 7 名、エアロビック競技日本代表候補選手 11 歳～17 歳 女性 11 名、専属コーチ 8 名

結果

収集データは倫理審査におけるインフォームドコンセント締結のため WEB 非公開
考察

日本代表レベルプレーヤーと全国大会レベルのプレーヤーたちは意識レベルの違う項目もあるが、習熟度に関して「他者への尊敬や協力・協働・協調」などは共通した高評価である。しかし身体能力について有能感を感じていないことやストレスによる感情のコントロールが代表・全国レベルともできないことから高ストレス下でのトレーニングを行っていることが考えられる。

まとめ

2003～2008 年には全国大会にあたるスズキジャパンカップ全日本選手権にてユース部門上位 3 以内に入賞したプレーヤーの中、50 人以上が 10 代～20 代前半に止めていることがその後の調査で明らかになった。1 つは燃え尽き症候群と言われるバーンアウト、もう一つは集団から離脱したドロップアウトである。GPGC 調査より始まり今後の展開として、今まで国内スポーツでは閉ざされてきた【なぜ選手が辞めていくのか】という大きな問題を解決するための一助になる。